

# 連歌師里村昌純の『葦守紀行』

——柏亭本『うつほ物語』親本所持者の旅の記録——

猪猪 川 眞俊 子

はじめに

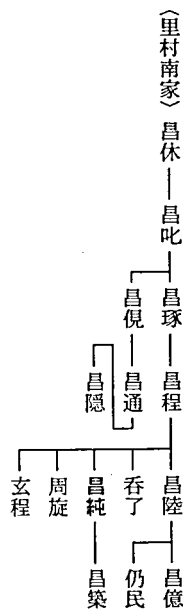
広島大学図書館中央図書館は、近世後期に柏亭眞直によつて書写された『うつほ物語』（全二十冊、柏亭本と称する）を蔵している。

稿者はこれまでに柏亭本を調査する機会を得、第四冊までの書誌・

前田家本との簡単な異同などの報告を行つてゐる。<sup>1)</sup>

この柏亭本の第一冊俊蔭巻には、巻首扉に「里村昌純自筆の本を  
もて／柏亭得一齋醜哉／うつし畢」と墨書されている。この書入れ  
によると、眞直は里村昌純が書写した『うつほ物語』を何らかの形  
で手にして全二十冊を書き写したようである。ただし書写年や書写  
経緯についての詳細は書かれていない。眞直には他に『落窪物語』  
自筆本があるが、こちらは奥書に永享三（一七四六）年書写とある。

里村昌純は、幕府柳営連歌の家である里村南家に慶安二（一六四  
九）年誕生、連歌に長け（初名昌勃）、法橋に叙せられている。享保  
七（一七二二）年没。



昌純の連歌活動は寛文年間より徐々にみられる。寛文元年に昌勃  
の名で室長老会興行『夢想漢和百韻』に座したのをはじめ、若い頃  
より様々な百韻の連衆となり、延宝年間に入ると幕府に出仕して連  
歌始めの場で御第三を務めている。福井久藏氏によると御第三とい  
うのは、里村家の宗匠以下十数人の連衆が座し、発句を宗匠、脇を  
將軍、第三を第二位の宗匠がよむ決まりがある中で、第三が脇の將  
軍の句の代作するのが慣例であり、連歌師の榮譽であつたという。  
ただし『徳川実紀』の記事によると、昌純が御第三を務めたのは福  
井氏が指摘される延宝三年よりも一年早い延宝二年正月十一日の幕  
府連歌始めからであり、その後享保四年まで務めている（延宝八年  
・元禄二年・元禄十二年・宝永五年・享保元年を除く）。

昌純は連歌論書『新式抄』『連歌新式拾遺抄』『連歌本式目』、連歌  
付句集『老の周諄』など多くの連歌関連書物のほか、古典の注釈書  
も残している。本稿はこれの中で昌純が元禄十四（一七〇二）年に備  
中国葦守（現岡山市足守）に出掛けた時の旅の記録『葦守紀行』を  
取り上げて、昌純の連歌師として、また文学者としての旅路を辿る  
ことにする。なお本稿に用いた本文は、天理図書館綿屋文庫本『葦

守紀行』(卷子本)であり、翻刻に際して句読点および濁点を私に付した。『葦守紀行』は他に祐徳稲荷中川文庫蔵本(冊子・二種)が存在する。この二本には文脈に関わる異同はみられない。

## 一 出立

元禄十四年九月十四日、五十三歳の昌純は都から備中葦守に向けて出立する。旅の理由と出立の経緯について、昌純は冒頭で次のように記している。

吉備の中津国あしもりと云所を、木下氏のなにがし領じ給ひて、いまそかりけり。文武を左右にして、萬のことわざに志深く物し給。やつがれも、吾妻に下りし折々、したしくまいりぬ。かゝるにこそし元禄十四年弥生のころ、播州赤穂の城をうけ取給ふおほやけごとを承り給ひて、事故なくし果給ひ、則いとま給はりて、所領に打休み給ふ比、相とぶらふべしやと御せうそこ有ければ、われもいまだ難波より西の方浦々磯のたゝずまひをしらず、かねて見まほしければ、いと嬉しくて、九月十四日、都を出たつ。

傍線部①の木下某とは当時の葦守藩主木下公定を指す。公定は承応二(一六五三)年誕生、享保十五(一七三〇)年没、昌純より四歳若く、詩書や連歌をよくした人物である。また傍線部②の赤穂城請け取りの件は忠臣蔵的一幕としてもよく知られており、『元禄年録』(柳宮日次記)、『御徒方万年記』、『脇坂家赤穂請取在番中覚書』など

の史料によると、三月十五日のことである。

昌純は、公定の招待を受けて葦守へと旅立つのであるが、右の序文から昌純の公定への強い敬愛の情が感じられ、両者はかなり親しい間柄であったと窺える。

冒頭に続いて出立当日の足取りが次のように書かれている。

其日しも丸山にて自然斎祇公の二百年忌の万句竟宴を、同氏昌億いとなみしかば、立より侍りしに、人々来あつまり、今春大夫などをよびてはやしせしかば、酔にのりて、申くだる程まかで、乗物して伏見におもむく。初夜にも成ぬらんかし、稲葉もる鳴子の音にふと目おどろかして、

守人は立る臥見の門田かな

夜舟よそひまうけたりければ、打乗より枕によりぬ。一眠りの程に難波の岸につきて旅店にて物くふ。

その日はちょうど宗祇の二百年忌の饗宴(傍線部③)が甥の昌億主催で行われており、昌純は出立前に立ち寄る。ちなみに昌純の住居は『元禄覚書』「卅四 御知行被下候連歌師#町連歌師」によると「御幸町竹屋町下ル町」にあり、昌億の家は「新在家中之町」にある。昌純は、丸山での宗祇遠忌饗宴を夕方四時過ぎに退席し、伏見から難波へと、いよいよ葦守に向かつて旅立つ。

## 二 九月十五日

十四日に都を出発した昌純は、葦守に着くまでの経緯を日記形式

で綴っている。以降一日ずつ足取りを辿ってみることとする。

十五日、朝、日いとよく晴てさしいづ。西の宮にまうで、

秋の海は名におふ西の宮めかな

山長く海廣くながめわたして心ゆくく

月もこゝにとゞまれ秋の濔川

散うかぶ木柴や秋のいくた河

兵庫の驛につきぬ。いたくな吹そといひけん山風、身にしみければ、

をと寒し秋さり衣うらの波

二日目、西の宮から兵庫へと向かう。奈良の都が「名におふ宮」として名高いが、「名にしおへば頼みぞかくる西の宮そなたに我を導くやとて」(広田社歌合承安二年・性阿・三、歌枕名寄・雲六七)と詠まれた歌もある。「いたくな吹そといひけん山風」は「山里の賤の松垣ひまをあらみいたくな吹きそごがらしの風」(後拾遺集卷第五秋下・山家ノ秋風といふ心をよめる・大宮越前・三〇)からである。昌純は、日記に連歌を詠み込み、歌句を引用していく。

### 三 九月十六日

十六日、今日も又快晴。月すこし残れるころ宿をいづ。道いと面白し。海士の家々ころもうつをぎよて、

冬近しねもすまに擣海入衣

松に波やかゝる所の秋の風

明石にかゝる程、あゆみくるしきと云し高すなご踏行。月の夜おもひやられて、

よるや猶見渡し近き浦の月

人麿堂にまうで、ふしおがむ。淡路嶋手にとる計近し。霧の晴わたりたるけしき、いふよしなし。一年住吉にまうでし比は西に向ひしかど、爰にては南にみる。

夕日かは朝霧のまの吾恥島

とかくして、かこ河の駅につく。

三日目、須磨、明石を経て加古川までの道のりを行く。須磨では光源氏に思いを馳せ、「またなくあはれるものはかかる所の秋なりけり」(源氏物語・須磨)をふまえて「かゝる所の秋の風」と詠む。「あゆみくるしき」は「須磨明石うらの見渡し近けれど歩み苦しき高砂子かな」(夫木和歌抄・光俊朝臣・二三雲、新撰六帖・二五五)を引く。その後、人麿堂(楠本神社、現明石市人丸町)に参詣し、淡路島を見て、加古川の駅まで行く。

### 四 九月十七日

十七日、空くもれり。八聲の鳥の初聲より宿を出て、かこ河をわたる。藤のより網長く引はへてわたす舟也けり。富士川などにこそ昔は在しが、いとめづらし。友とする人独して行に、夜もやうくあけぬ。小雨降いづ。姫路の方をみれば、霧いと深し。

汐のみちひめぢにあらぬや霧の海

一里餘過て山田と云村有。稲葉刈ほしたるを見て、

刈つみし稲のすがたも山田かな

終日に雨降やまで、からうじてうねの宿につきぬ。

四日目、加古川を渡り、山田村を通り、有年の宿に着く。雲行きが怪しくなり雨の中先へと進む。「八聲の鳥の〜」は「思ひかね越ゆる閑路に夜を深み八声の鳥に音をぞ添えつる」(千載集卷第十五恋歌五・源雅頼・凸凸)の引用。加古川では藤の頼綱を見て富士川を連想する。富士川の頼綱については、「浮き橋に竹のよりづなうちはへてを舟ならぶる藤の川なみ」(夫木和歌抄雑部三・法眼慶融・凸凸)と詠まれた歌がある。

## 五 九月十八日

十八日、昨日終日雨降けるなごり、道のぬかり深く、夜の程は歩人共のよろほひたふれぬべければとて日さしあがりてより宿をいづ。あのごとく行わづらふ。遠近の山紅葉所々染わたせるをみて、

山くくの錦はひなの都哉

みつ石と云里のわたり、夜寒をわびし虫どもの朝日さす方に仄々鳴をきゝて、

ふたつみつ石まになくやきりぐす

莓苔石上晚蕨行と云けん、かくこそとふとおもひつゞけぬ。片

上といふ所は、山をうしろに海を前にて、にぎはゞしき里也けり。北なる近き山に雲のかゝれるを見やりて、

秋もはやしぐるゝかたかみねの雲

けき、遅く出ければ、日暮はてゝたどるく岡山といふ思ふ泊まででは行つかで、二里許こなた古津と云村の民の家ゐに宿かりてぬ。

五日目、三石、片上、古津村と進む。前日の雨で道が悪く、苦しい歩みが続く。「夜寒をわびし〜」は、西行の「きりぎりす夜寒に秋のなるままに弱るか声の遠ざかりゆく」(新古今集卷第五秋歌下・三三)が参考になろうか。「莓苔石上晚蕨行」は「酔慈恩文郁上人一詩」(賈島・長江集)の一節である。この日は目的の岡山まで辿り着くことが出来なかつた。

## 六 九月十九日、暮守到着

十九日、けふはあしもりにつきぬべければ、朝とく起て髪そりひげぬきなど形つくろふもおかし。道に出て岡山をすぎ、宮うちと云ところ有。左の方に松枝茂り合たる山あり。麓に鳥居立てかうぐし。吉備津宮也といふ。

紅葉せん露に木々ひつみやまかな

はるかに物みしぬ。板倉と云驛よりあしもりへわかるゝ道有て午の時計に行つきぬ。

在留の程、於鳥羽次郎八宅

さす菊は千代に千世そふこがめ哉

岩屋山見に行道すから、自然の山路の菊さき残れり。

冬も秋をおく山ふかしぎくの色

など口すさびて岩屋山につく。此岩のかたち、人間の所為にあらず。七八間計もそびえたる石の上に、十四五間四方の大石打おほひて云べき言の葉もなし。

いかに染時雨もらじをいはや山

太守両吟漢和百韻満座又両吟和漢

露や猶めぐみ滋木の下紅葉

布施新兵衛家にて

風霜をふるやあるじにはの松

於鳥羽左兵衛宅

宿とへどころありけり一時雨

六日目、いよいよ葦守到着の日である。朝から心をはずませる様子が窺える。岡山から宮内に入り、吉備津宮（吉備津神社、現岡山市）を過ぎて板倉の分岐から葦守へと向かい、着いたのは正午頃であつた。

葦守滞在中は、岩屋山行き以外、各家での連歌会が中心だつたようである。太守公定とは漢和・和漢連歌の両吟を楽しんでいる。また鳥羽氏とは、足守藩の代官的庄屋であり、藩の再興以來大きな勢力を持つている一族である。

## 七 帰路

上京のころ、口號ども

明石にて

夜や波いつもしぐれにあかし潟

昆陽にて

過る野をこやとぞまねく枯薄

瀬河にて

朝水せかはよどまんながれかな

郡山にて

霜こほりやまぬや朝な夕嵐

芥川にて

色朽ぬおち葉はなにかあくた河

山崎にて

うたふ聲やまさきのかつら神楽歌

八幡にて

河水のすまん時こそ神無月

淀にて

淀川は汀にそしる朝こほり

鳥羽にて

冬かけてとはに浪こす稲葉哉

于時元祿十四<sup>四</sup>年

孟冬中旬 昌純<sup>昌純</sup>

往路の記録と異なり、帰路については各名所で詠んだ句を記すにとどめている。おそらく帰京後にまとめたものであろう。各句に地名を詠み込んでおり、物名の句になつてゐるものも多い。奥書によるとまとめられたのは十月中旬、出立から約一ヶ月後にあたる。葦守から帰京してまもなく、旅の報告をかねて編んだものであるとも考えられる。

### おわりに

京都から葦守まで、片道六日間、約二二〇kmの旅である。葦守滞在中の公定との交流や、帰路の記録に物足りなさがあるものの、葦守行きに対する思いの深さや、各地で詠まれた数々の連歌に、昌純の人間性や連歌師としての有りようが窺える。昌純については、公定との関係、幕府柳営連歌師としての位置付け、連歌の句風、連歌論など、検討が必要である。また昌純の『うつほ物語』書写の経緯、さらに柏亭真直が昌純自筆本を書写した経緯について、今後探っていきたいと考える。

### 〔注〕

(1) 拙稿「柏亭本『うつほ物語』(広島大学蔵)の特色(その一)——俊蔭巻本文の前田家本との比較を中心に——」(『古代中世国

文学』第11号 平10・4)、「同(その二)——藤原の君巻・忠こそ巻——」(同第15号 平12・7)、「同(その三)——春日詣巻(付「桂」の段)——」(同第16号 平12・12)。

(2) 福井久蔵氏『連歌の史的研究全』(昭44 有精堂)。

(3) 三史料ともに『赤穂義士史料』上(昭6 雄山閣)所収。

(4) 『新撰京都叢書』第一巻(昭60 臨川書店)所収。なお、『元禄覚書』解題によると、本書は元禄十三(一七〇〇)年から同十六年にいたる間に調査、書き上げ、編集されたものとされている。

(5) 『岡山県史』第六卷・近世I(昭59 山陽新聞社)による。

(6) 昌純の作品に『里村昌純備中下向途次発句』(写・一卷)があり、福井氏は前注(2)で以下のように紹介している。

元禄十四年秋西下の時、須磨・明石・西宮・兵庫・姫路・吉備津宮・片上・八幡、及び木下肥後守館にて和漢興行の時の発句を載せてある。帝国図書館本。

\* 八代集の引用は岩波・新日本古典文学大系、その他の和歌の引用は新編国歌大観により、適宜私に表記を改めた。源氏物語の引用は小学館・新編日本古典文学全集による。

\* 『葦守紀行』の翻刻および注釈を許可して下さった天理図書館に厚く御礼申し上げます。

——いかわ・ゆうこ、弓削商船高等専門学校校助教授——